西田文学読書会（第29回）　　2023.11.18（13：40～16：00）

　村上春樹

「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」

　岡部・佐野・渡辺・楯谷・奈原・大藤・田中・本田

⦿この小説のタイトルは、「僕の貧乏」が「チーズ・ケーキのような形」をしているという比喩からできている。この比喩における「比喩するもの」（チーズ・ケーキのような形）と「比喩されるもの」（僕の貧乏）の関係をどう理解するか。

AはまるでBのようだ。

・渡辺：これは、日本の貧乏ではないか。1973年頃の日本全体が貧しい時、まだ猫の額のような土地に家を建てていた、騒音もあったし、道路の騒音、工場の騒音、公害の時代。日本の貧乏の比喩ではないか。

・佐野：考えているうちに、言葉の問題かなあと思う。言葉を理解するとは、一見飛躍のように見えるが、全ての言葉の理解とはこういうふうに成り立っている。1970年代以前の日本の貧乏。「貧乏」だが、苦痛がそれほどない。現代はお金が無くても貧乏の暗さがない。

貧乏＝お金がない。「貧乏」と言う言葉から、必ずしも暗さ、みじめさを連想しないのではないか。小説も読者も。

・田中：1973～74年は私の高校時代～大学時代。当時の貧乏、現在は貧困と言う言葉（貧しくて困る）当時は皆お金が無かったが、そのことが生きている事への絶望、辛さと直結しなかった。それを味わう時代だった。タイトルが三角地帯をチーズケーキと言う言葉を使っているところに、作者の貧乏という言葉を持ち出したところに作者の思いが現れているように思う。チーズケーキとは、チョコレートケーキと少し違うような気がする。作者の意図がそこから感じられる。チョコレートケーキでなく、チーズケーキとは執筆時の思いがある。当時思ったのでない。

・渡辺：チーズケーキは高級感があるケーキ。土地の値段が高いことと関係する？

・楯谷：なぜチーズケーキかといえば、他のケーキは12等分するのは難しい。チーズケーキ＝シンプルな具が載っていない硬いケーキなら切れる。チョコレートケーキ、ザッハトルテは分厚いが甘すぎる。また、楔形と言うのが普通なのに、楔形のような…では面白くない。貧乏に明るくてポジティブなイメージ（新婚の若夫婦の甘さ）がある。甘酸っぱい感じがちょうどよい。チョコレートケーキでは甘すぎる。若い。二年もよく住んだなと思う。うるさすぎて騒音で会話ができない。この二年間は会話なしに生活が成り立った。二年は新婚あまりしゃべらなくても持つのが限界。言葉なしでも幸せ。恋人達には言葉はいらないという心境だったのではないか。生地が固いニューヨークチーズケーキ＝アメリカンな感じがする。ヨーロッパのチョコレートケーキのイメージとは違う。

・岡部：若さって何だろう？　貧乏とあるが生活苦は感じない。都会暮らしで田舎暮らしではない。避けられれば避けられるものをわざわざ選んで、彼らを幸せにしている者がある＝若さ、表現したい時代の匂いが捉えられている。僕たちは本当に幸せだったという満足感。チーズケーキはありふれている、誰でも手に入る中流感。時代感。小さな幸せ。60年代は植木等のサラリーマン時代の明暗がすごかったが70年代の若者文化。若者のライフスタイルを形成している都会暮らし。太陽はただだった。若者はジーンズをはいていただろう。当時核家族化していた。72は12の倍数で、もう12足したら84になる。「われわれ」と言う人称が最後に「ぼくたち」と言う言い方になる。世代として時代として捉えている？

・大藤：最初読んだ時何の感想もなかったが、振り返った時のイメージとして、こういうのが会ったらいいなあと思った。貧乏＝苦痛でない。今なら貧困。チーズケーキには貧乏と結びつかない。僕の生きる中で結びつくはずのないものが結びつくのがいいなあ。僕はその二つを結びつけるのがいいなあ。三角地帯との結びつき。人々はいい感覚を持っていない。三角地帯と人々の結びつきとは異なる関係を結んで、幸せと感じる。僕は別にそこがずれていても、住めそうだから借りるようにしようよ、僕と三角地帯との関係でしかできない体験をしている。

・田中：僕がこの土地を選ぶには、この家が古いがずっと昔棲んでいた家に似ていた。まるで結婚して家庭を持っているような気がする。僕にとっての家庭を持つということへの僕なりの思い、僕にとってはこの家がそういう者なのだ、家庭を持つことと家具がそろっていることとは違う。僕なりの家庭を持つことへの思いがつながって行っているような気がする。チーズケーキ＝土地だけでなく、そこに立っている家への思いも含まれている。

・楯谷：な「われわれ」妻、僕、猫＝彼女を妻と言わないで彼女という。別れたかも？　今の状態を含まない言葉として、今は結婚していないのかも？　含みがあるのではないか？　二人と一匹で家庭とされている。

・岡部：我々には猫も含む。家庭をパッケージして相対化している？

・佐野：妻を彼女と呼ぶことに違和感がない。同居人賭して考えている。楯谷さんと岡部さんがそこに着目したことに違和感がある。

・楯谷：パン屋再襲撃には「妻」と出て来る。配偶者をどう呼ぶかは難しい。今現状が分からないから、つまと呼ばないで彼女十読んでいる気がする。

・佐野：執筆辞典で我々と言う言葉とつかっているので、現在は我々と言う感覚を持っているのかと思っていたが…。

楯谷：二年間を明るく描き、それ以後の暗さを対比しているのではないか？　明るさを印象的に描いている。春の光の明るさ後から思い出してそうなるのではないか？

佐野：当時＝土地の三角地帯であって、

チーズケーキと言いだしたのは執筆時点

執筆時現在から振り返ってのイメージであって、当時どうだったかとは別だ

楯谷：チーズケーキとは執筆時からレトロっぽい言い方

当時を懐かしく良いものと回想している

佐野：チーズケーキと貧乏は関係ないどころか、密接な関係があるものに見えてくるのではないか

岡部：三角地帯＝閉鎖され隔絶された密閉された地帯というイメージがあるのではないか

楯谷：鉄道線路に囲まれているから、その先端の離れ小島のような地帯。うらぶれていた。

岡部：文学として「いやですね」。

楯谷：お花畑感を感じて、いやですねもちょっとわかる。

岡部：当時は不公平感はない。これはなんだ？

楯谷：コミュニケーションの断絶＝ゴダール

コミュニケーション不全の不幸を感じる。電車はケーキを切るナイフにあたる。

岡部：電車はケーキを切るナイフにあたる、ずたずたになる

大藤：ずたずたになって別れてもよい、そういう良さがある、関係の結び方に余分がある、地元の人は考えたくないという以外にないが、三角地帯との関係の結び方はそれではない僕の結び方＝ストとの関係の結び方にしても、通勤客とは異なる見方。世間の他の見方とは異なる見方がここにある。電車に分裂されるのも、しゃべらなくてもまあいいかという感じ方を可能にするが、それもはっきり書かれていないが、そういうところもいい。

佐野：スッと来ない。

手放しの幸せ？？？

岡部：影がない。80年代は翳があるはずだが、70年代には影がない。影がなくなると不安だ。

佐野：現在と過去の対比が際立つということか？

楯谷：太陽の光はただだった。日当たりの良い立地。線路も太陽の光が当たる。住宅の日照条件＝太陽の光がタダでない世界。条件が悪すぎるから太陽はただ。太陽の光を満喫できるのは若い人限定。光当たり過ぎると皮膚がんにもなるし、皮膚があれるし、疲れる。日翳を探して歩く。若さ全開という感じ。影がない訳ではなく、期間限定の幸せをすごく感じる。若い時期限定という感じ。

田中：金がなければ内で人生すごく簡単だ。当時は金がなければ内でやっていけた。太陽の光がタダと繋がる。しかし、それでやって行けるのは二年が限度。二年しか夫婦生活は続かなかったということか？　今の思いと当時の思いを結びつけながら書かれた小説か？

佐野：幸せなのはストライキの期間限定（ほんの数日）。それ以外の時はどういう過ごし方をしていたのか。

田中：冬の大変さから春へのコントラスト。冬の大変さがあるから春の幸せがあるような感じもある。

佐野：静かだったとうるささの対比

田中：湖の底に、とは？自分達だけの世界を作れた？　三角地帯である事との関係は？　周りの人の評価と自分の評価との違いを際立たせる、周囲との遮断の意味。

楯谷：天気がいいと視界の中に入るのは線路と青い空だけ＝周りの世界との隔絶感

岡部：安定した連続した物語として受け止めてはいけない。なにか突然挿入されたり、不連続、断続したシーンのパッチワークである。騒音によってずたずたに切り刻まれながらの生活＝彼は幸せだと思っている。一見何事もない日常の奥に隠された者を読まなくてはいけない

大藤：周りの評価とのコントラスト。周りとの隔絶が良いという訳ではない。騒音と結びつけられた人生。岡部さんの意見を聞いてなるほどと思った。不連続だが生きていく中でつながって行く感じがいいのかな？

佐野：救いのある方向で考えるか？

大藤：電車で何も聞こえない＝離婚の可能性もあるが、その方向にも救いがある。安定したシーンで見てはいけない。

渡辺：離婚はしてないと感じる。

佐野：離婚はないと感じる。

岡部：離婚は確定的と感じる。田中、楯谷もそれに一票。コントラストを元に考えれば、そっちに賛成。

楯谷：「若気の至り」と言うニュアンスを感じる。若気の至りには良い所もある。若い故の実験。流れとしては否定的。

佐野：僕の貧乏

お金が無いという意味

【『村上春樹全作品』版】

チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　村上春樹

139

　我々はその土地を「三角地帯」と呼んでいた。それ以外にどう呼べばいいのか僕には見当もつかなかった。だってそれはまったくの、絵に描いたような三角形の土地だったのだ。僕と彼女はそんな土地の上に住んでいた。一九七三年だか四年だかの話だ。

　「三角地帯」といっても、いわゆるデルタの形を想像してもらっては困る。我々の住んでいた「三角地帯」はもっと細長く、くさびのような形をしている。もう少しくわしく説明するなら、まずはホール・サイズのまるいチーズ・ケーキを思い浮かべていただきたい。それからそれを包丁で十二等分していただきたい。つまり時計の文字盤のような格好に切れめを入れていくわけである。その結果として当然、先端の角度が三十度のケーキ・ピースが十二個できあがる。そのひとつを皿にとって、紅茶でもすすりながらじっくりと眺めて下さい。これが―この先のとがった細長いケーキ・ピースが―我々の「三角地帯」の正確な形である。

　どうしてそのような不自然な形の土地ができてしまったのか、とあなたは訊ねるかもしれない。あるいは訊ねないかもしれない。どちらでもいい。どちらにしても、何故そうなったのかは僕にもよくわからないのだ。地元の人に訊ねてみてもよくわからなかった。それはずっとずっと昔から三角形で、今も三角形で、これから先もずっとずっと三角形であるに違いないという程度のことしかわからなかった。地元の人々はどちらかというとその「三角地帯」についてはあまりしゃべりたくないし考えたくもないという感140じだった。どうして「三角地帯」がそんな風に―耳のうしろのいぼみたいに―冷たく扱われるのか、その理由はよくわからなかった。たぶん変な形をしていたせいだろう。

　「三角地帯」の両脇には二種類の鉄道線路が走っていた。ひとつは国鉄線で、もうひとつは私鉄線である。その二つの鉄道線はしばらく併走してから、このくさびの先端を分岐点として、まるでひき裂かれるように不自然な角度で北と南に分かれるのだ。これはなかなかの眺めである。「三角地帯」の先端で電車の往き来を眺めていると、まるで波を割って海上をつき進んでいく駆逐艦のブリッジに立っているような気分になる。

　しかし住み心地・居住性という観点から見れば「三角地帯」は実に無茶苦茶な代物だった。まず騒音がひどかった。それはそうだ。なにしろ二本の鉄道線路にぴったりとはさみこまれているわけだから、うるさくないわけがない。玄関の戸を開けると目の前を電車が走っているし、裏側の窓を開けるとそれはそれでまた別の電車が目の前を走っている。目の前という表現は決して誇張ではない。じっさい乗客と目が合って会釈できるくらい間近に電車は走っていたのだ。今思い出してもたいしたものだという気がする。

　でも終電が通ってしまえばあとは静かじゃないかとあなたは言うかもしれない。まあ普通はそう考える。僕だって実際に引越してくるまではそう考えていた。しかしそこには終電なんて存在しなかった。旅客列車が午前一時前に全部の運行を終えてしまうと、今度は深夜便の貨車の列がそのあとをひきついだ。そして明け方までかけて貨車がひととおり通り過ぎてしまうと、翌日の旅客輸送が始まる。その繰りかえしが来る日も来る日も延々とつづくわけだ。

　やれやれ。

　我々がわざわざそのような場所を選んで住んだのは一にも二にも家賃が安かったからだ。一軒家で部屋が三つあって、風呂がついていて、小さな庭まであった、それで六畳一間のアパートと同じくらいの家賃141なのだ。一軒家だから猫だって飼える。まるで我々のために用意されたような家だ。我々は結婚したばかりで、自慢するわけじゃないけれど、ギネス・ブックに載ってもおかしくないくらい貧乏だった。我々は駅前の不動産屋の貼り紙でその貸家をみつけた。条件と家賃と間取りを見る限り、それは驚異的な掘り出しものだった。

「安いこた安いよ」と頭の禿げた不動産屋が言った。「ま、かなりうるさいんだけどさ、それさえ我慢できりゃ掘り出しものと言えなくもないだろうね」

「とにかく見せてもらえますか？」と僕は訊ねた。

「いいよ、でもさ、あんたたちだけで行ってきてくんないかな？　俺、あそこ行くと頭痛むんだよ」

　彼は鍵を貸してくれ、家までの地図を描いてくれた。気楽な不動産屋だ。

　駅から見ると「三角地帯」はすぐ近くに見える。でも実際に歩いてみると、そこに辿りつくまでにはおそろしいくらい時間がかかる。鉄道線路をぐるっと迂回し、陸橋を渡り、こぎたない坂道を下りたり上ったりして、やっと後側から「三角地帯」に回り込むのである。あたりには商店とかそんなものは一切ない。見事なくらいうらぶれている。

　僕と彼女は「三角地帯」の先端にぽつんと建っている家の中に入り、一時間ばかりそこでぼんやりしていた。そのあいだにずいぶんたくさんの電車が家の両側を通り過ぎていった。特急が通過すると、窓ガラスがピシピシと音を立てた。電車が通っているあいだはお互いの話は聞こえなかった。何かを話している最中に電車が通ると、我々は口をつぐんで電車がすっかり通りすぎてしまうのを待った。静かになって我々が話しはじめると、またすぐに次の電車がやってきた。そういうのってコミュニケーションの分断というか分裂というか、すごくジャン＝リュック・ゴダール風だ。

　でも騒音を別にすれば、家の雰囲気自体はなかなか悪くなかった。造りはたしかに古めかしいし全体的142に傷んではいたけれど、床の間やら濡れ縁やらがあって感じは良かった。窓から射し込んだ春の光が、畳の上に小さな四角い日だまりを作り出していた。それは僕がずっと昔、ほんの小さな子供の頃に住んだことのある家に似ていた。「借りることにしようよ」と僕は言った。「たしかにうるさいけれど、なんとか慣れると思うよ」

「あなたがそう言うんなら、それでいいわよ」と彼女は言った。

「ここでこんな風にじっとしているとさ、まるで自分が結婚して、家庭を持っているような気がするんだ」

「だって本当に結婚したんじゃない？」

「そりゃあまあそうだけどさ」と僕は言った。

我々は不動産屋に戻り、家を借りたいと言った。

「うるさくなかった？」と頭の禿げた不動産屋が訊ねた。

「そりゃあうるさかったけれど、なんとか慣れますよ」と僕は言った。

　不動産屋は眼鏡をはずしてガーゼでレンズを拭き、湯飲みの茶を一口すすり、それから眼鏡をかけて僕の顔を見た。

「ま、若いからね」と彼は言った。

「ええ」と僕は言った。

　そして我々は賃貸契約をとりかわした。

　引越しは友だちのライトバン一台で十分、間にあった。布団と衣類と食器と電気スタンドと何冊かの本と一匹の猫、それが我々の全財産だった。ラジオもなければテレビもなかった。洗濯機も冷蔵庫も食卓も143ガス・ストーブも電話も湯わかしも電気掃除機もトースターも、何ひとつなかった。我々はそれくらい貧乏だった。だから引越しといってもものの三十分とかからなかった。金がなければないで人生はすごく簡単だ。

　引越しを手伝ってくれた友人は二本の線路にはさみこまれた我々の新しい住居を目にしてかなりびっくりしたようだった。彼は引越しを終えてから僕の方を向いて何かを言おうとしたが、ちょうど特急列車が走りかかったおかげで何も聞こえなかった。

「何か言った？」

「本当にこんなところに人が住むんだなあ」と感心したように彼は言った。

　結局我々はその家に二年住んだ。

　おそろしく建てつけの悪い家で、すきま風がいたるところから入ってきた。おかげで夏は快適だったが、そのかわり冬は地獄だった。ストーブを買う金もなかったので、日が暮れると僕と彼女と猫は布団の中にもぐりこみ、文字どおり抱きあって眠った。朝起きてみたら台所の流し台が凍りついていたなんてこともしょっちゅうだった。

　冬が終わると、春がやってきた。春は素敵な季節だった。春がやってくると、僕も彼女も猫もほっとした。四月には鉄道のストライキが何日かあった。ストライキがあると、僕たちは本当に幸せだった。電車は一日じゅうただの一本も線路の上を走らなかった。僕と彼女は猫を抱いて線路に降り、ひなたぼっこをした。まるで湖の底に座っているみたいに静かだった。僕たちは若くて、結婚したばかりで、太陽の光はただだった。

　僕は今でも「貧乏」という言葉を聞くたびに、あの三角形の細長い土地のことを思い出す。今あの家に144はいったいどんな人が住んでいるんだろう？

【講談社文庫版】

チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　村上春樹

我々はその土地を「三角地帯」と呼んでいた。それ以外にどう呼べばいいのか僕には見当もつかなかった。だってそれはまったくの、絵に描いたような三角形の土地だったのだ。僕と彼女はそんな土地の上に住んでいた。一九七三年だか四年だかの話だ。

　「三角地帯」といっても、いわゆるデルタの形を想像してもらっては困る。我々の住んでいた「三角地帯」はもっと細長く、くさびのような形をしている。もう少しくわしく説明するなら、まずはフォール・サイズのまるいチーズ・ケーキを思い浮かべていただきたい。それからそれを包丁で十二等分していただきたい。つまり時計の文字盤のような格好に切れめを入れていくわけである。その結果として当然、先端の角度が三十度のケーキ・ピースが十二個できあがる。そのひとつを皿にとって、紅茶でもすすりながらじっくりと眺めて下さい。これが―この先のとがった細長いケーキ・ピースが―我々の「三角地帯」の正確な形である。

　どうしてそのような不自然な形の土地ができてしまったのか、とあなたは訊153ねるかもしれない。あるいは訊ねないかもしれない。どちらでもいい。どちらにしても、何故そうなったのかは僕にもよくわからないのだ。地元の人に訊いてみてもよくわからなかった。それはずっとずっと昔から三角形で、今も三角形で、これから先もずっとずっと三角形であるに違いないという程度のことしかわからなかった。地元の人々はどちらかというとその「三角地帯」についてはあまりしゃべりたくないし考えたくもないという感じだった。どうして「三角地帯」がそんな風に―耳のうしろのいぼみたいに―冷たく扱われるのか、その理由はよくわからなかった。たぶん変な形をしていたせいだろう。

　「三角地帯」の両脇には二種類の鉄道線路が走っていた。ひとつは国鉄線で、もうひとつは私鉄線である。その二つの鉄道線はしばらく併走してから、このくさびの先端を分岐点として、まるでひき裂かれるように不自然な角度で北と南に分かれるのだ。これはなかなかの眺めである。「三角地帯」の先端で電車の往き来を眺めていると、まるで波を割って海上をつき進んでいく駆逐艦のブリッジに立っているような気分になる。

　しかし住み心地・居住性という観点から見れば「三角地帯」は実に無茶苦茶な代物だった。まず騒音がひどかった。それはそうだ。なにしろ二本の鉄道線路にぴったりとはさみこまれているわけだから、うるさくないわけがない。玄154関の戸を開けると目の前を電車が走っているし、裏側の窓を開けるとそれはそれでまた別の電車が目の前を走っている。目の前という表現は決して誇張ではない。じっさい乗客と目が合って会釈できるくらい間近に電車は走っていたのだ。今思い出してもたいしたものだという気がする。

　でも終電が通ってしまえばあとは静かじゃないかとあなたは言うかもしれない。まあ普通はそう考える。僕だって実際に引越してくるまではそう考えていた。しかしそこには終電なんて存在しなかった。旅客列車が午前一時前に全部の運行を終えてしまうと、今度は深夜便の貨車の列がそのあとをひきついだ。そして明け方までかけて貨車がひととおり通り過ぎてしまうと、翌日の旅客輸送が始まる。その繰りかえしが来る日も来る日も延々とつづくわけだ。

　やれやれ。

　我々がわざわざそのような場所を選んで住んだのは一にも二にも家賃が安かったからだ。一軒家で部屋が三つあって、風呂がついていて、小さな庭まであって、それで六畳一間のアパートと同じくらいの家賃なのだ。一軒家だから猫だって飼える。まるで我々のために用意されたような家だ。我々は結婚したばかりで、自慢するわけじゃないけれど、ギネス・ブックに載ってもおかしくないくらい貧乏だった。我々は駅前の不動産屋の貼り紙でその貸家をみつけ156た。条件と家賃と間取りを見る限り、それは驚異的な掘り出しものだった。

「安いこた安いよ」と頭の禿げた不動産屋が言った。「ま、かなりうるさいんだけどさ、それさえ我慢できりゃ掘り出しものと言えなくもないだろうね」

「とにかく見せてもらえますか？」と僕は訊ねた。

「いいよ、でもさ、あんたたちだけで行ってきてくんないかな？　俺、あそこ行くと頭痛むんだよ」

　彼は鍵を貸してくれ、家までの地図を描いてくれた。気楽な不動産屋だ。

　駅から見ると「三角地帯」はすぐ近くに見える。でも実際に歩いてみると、そこに辿りつくまでにはおそろしいくらい時間がかかる。鉄道線路をぐるっと迂回し、陸橋を渡り、こぎたない坂道を下りたり上ったりして、やっと後側から「三角地帯」に回り込むのである。あたりには商店とかそんなものは一切ない。見事なくらいうらぶれている。

　僕と彼女は「三角地帯」の先端にぽつんと建っている家の中に入り、一時間ばかりそこでぼんやりしていた。そのあいだにずいぶんたくさんの電車が家の両側を通り過ぎていった。特急が通過すると、窓ガラスがピシピシと音を立てた。電車が通っているあいだはお互いの話は聞こえなかった。何かを話している最中に電車が通ると、我々は口をつぐんで電車がすっかり通りすぎてしまう157のを待った。静かになって我々が話しはじめると、またすぐに次の電車がやってきた。そういうのってコミュニケーションの分断というか分裂というか、すごくジャン＝リュック・ゴダール風だ。

　でも騒音を別にすれば、家の雰囲気自体はなかなか悪くなかった。造りはたしかに古めかしいし全体的に傷んではいたけれど、床の間やら濡れ縁やらがあって感じは良かった。窓から射し込んだ春の光が、畳の上に小さな四角い日だまりを作り出していた。それは僕がずっと昔、ほんの小さな子供の頃に住んだことのある家に似ていた。「借りることにしようよ」と僕は言った。「たしかにうるさいけれど、なんとか慣れると思うよ」

「あなたがそう言うんなら、それでいいわよ」と彼女は言った。

「ここでこんな風にじっとしているとき、まるで自分が結婚して、家庭を持っているような気がするんだ」

「だって本当に結婚したんじゃない？」

「そりゃあまあそうだけどさ」と僕は言った。

我々は不動産屋に戻り、家を借りたいと言った。

「うるさくなかった？」と頭の禿げた不動産屋が訊ねた。158

「そりゃあうるさかったけれど、なんとか慣れますよ」と僕は言った。

　不動産屋は眼鏡をはずしてガーゼでレンズを拭き、湯呑みの茶を一口すすり、それから眼鏡をかけて僕の顔を見た。

「ま、若いからね」と彼は言った。

「ええ」と僕は言った。

　そして我々は賃貸契約をとりかわした。

　引越しは友だちのライトバン一台で十分間にあった。布団と衣類と食器と電気スタンドと何冊かの本と一匹の猫、それが我々の全財産だった。ラジオもなければテレビもなかった。洗濯機も冷蔵庫も食卓もガス・ストーブも電話も湯わかしも電気掃除機もトースターも、何ひとつなかった。我々はそれくらい貧乏だった。だから引越しといってもものの三十分とかからなかった。金がなければないで人生はすごく簡単だ。

　引越しを手伝ってくれた友人は二本の線路にはさみこまれた我々の新しい住居を目にしてかなりびっくりしたようだった。彼は引越しを終えてから僕の方を向いて何かを言おうとしたが、ちょうど特急列車が走りかかったおかげで何も聞こえなかった。159

「何か言った？」

「本当にこんなところに人が住むんだなあ」と感心したように彼は言った。

　結局我々はその家に二年住んだ。

　おそろしく建てつけの悪い家で、すきま風がいたるところから入ってきた。おかげで夏は快適だったが、そのかわり冬は地獄だった。ストーブを買う金もなかったので、日が暮れると僕と彼女と猫は布団の中にもぐりこみ、文字どおり抱きあって眠った。朝起きてみたら台所の流し台が凍りついていたなんてこともしょっちゅうだった。

　冬が終わると、春がやってきた。春は素敵な季節だった。春がやってくると、僕も彼女も猫もほっとした。四月には鉄道のストライキが何日かあった。ストライキがあると、僕たちは本当に幸せだった。電車は一日じゅうただの一本も線路の上を走らなかった。僕と彼女は猫を抱いて線路に降り、ひなたぼっこをした。まるで湖の底に座っているみたいに静かだった。僕たちは若くて、結婚したばかりで、太陽の光はただだった。

　僕は今でも「貧乏」という言葉を聞くたびに、あの三角形の細長い土地のことを思い出す。今あの家にはいったいどんな人が住んでいるんだろう？

【『村上春樹全作品』版】

チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　村上春樹

139

　我々はその土地を「三角地帯」と呼んでいた。それ以外にどう呼べばいいのか僕には見当もつかなかった。だってそれはまったくの、絵に描いたような三角形の土地だったのだ。僕と彼女はそんな土地の上に住んでいた。一九七三年だか四年だかの話だ。

　「三角地帯」といっても、いわゆるデルタの形を想像してもらっては困る。我々の住んでいた「三角地帯」はもっと細長く、くさびのような形をしている。もう少しくわしく説明するなら、まずはホール・サイズのまるいチーズ・ケーキを思い浮かべていただきたい。それからそれを包丁で十二等分していただきたい。つまり時計の文字盤のような格好に切れめを入れていくわけである。その結果として当然、先端の角度が三十度のケーキ・ピースが十二個できあがる。そのひとつを皿にとって、紅茶でもすすりながらじっくりと眺めて下さい。これが―この先のとがった細長いケーキ・ピースが―我々の「三角地帯」の正確な形である。

　どうしてそのような不自然な形の土地ができてしまったのか、とあなたは訊ねるかもしれない。あるいは訊ねないかもしれない。どちらでもいい。どちらにしても、何故そうなったのかは僕にもよくわからないのだ。地元の人に訊ねてみてもよくわからなかった。それはずっとずっと昔から三角形で、今も三角形で、これから先もずっとずっと三角形であるに違いないという程度のことしかわからなかった。地元の人々はどちらかというとその「三角地帯」についてはあまりしゃべりたくないし考えたくもないという感140じだった。どうして「三角地帯」がそんな風に―耳のうしろのいぼみたいに―冷たく扱われるのか、その理由はよくわからなかった。たぶん変な形をしていたせいだろう。

　「三角地帯」の両脇には二種類の鉄道線路が走っていた。ひとつは国鉄線で、もうひとつは私鉄線である。その二つの鉄道線はしばらく併走してから、このくさびの先端を分岐点として、まるでひき裂かれるように不自然な角度で北と南に分かれるのだ。これはなかなかの眺めである。「三角地帯」の先端で電車の往き来を眺めていると、まるで波を割って海上をつき進んでいく駆逐艦のブリッジに立っているような気分になる。

　しかし住み心地・居住性という観点から見れば「三角地帯」は実に無茶苦茶な代物だった。まず騒音がひどかった。それはそうだ。なにしろ二本の鉄道線路にぴったりとはさみこまれているわけだから、うるさくないわけがない。玄関の戸を開けると目の前を電車が走っているし、裏側の窓を開けるとそれはそれでまた別の電車が目の前を走っている。目の前という表現は決して誇張ではない。じっさい乗客と目が合って会釈できるくらい間近に電車は走っていたのだ。今思い出してもたいしたものだという気がする。

　でも終電が通ってしまえばあとは静かじゃないかとあなたは言うかもしれない。まあ普通はそう考える。僕だって実際に引越してくるまではそう考えていた。しかしそこには終電なんて存在しなかった。旅客列車が午前一時前に全部の運行を終えてしまうと、今度は深夜便の貨車の列がそのあとをひきついだ。そして明け方までかけて貨車がひととおり通り過ぎてしまうと、翌日の旅客輸送が始まる。その繰りかえしが来る日も来る日も延々とつづくわけだ。

　やれやれ。

　我々がわざわざそのような場所を選んで住んだのは一にも二にも家賃が安かったからだ。一軒家で部屋が三つあって、風呂がついていて、小さな庭まであった、それで六畳一間のアパートと同じくらいの家賃141なのだ。一軒家だから猫だって飼える。まるで我々のために用意されたような家だ。我々は結婚したばかりで、自慢するわけじゃないけれど、ギネス・ブックに載ってもおかしくないくらい貧乏だった。我々は駅前の不動産屋の貼り紙でその貸家をみつけた。条件と家賃と間取りを見る限り、それは驚異的な掘り出しものだった。

「安いこた安いよ」と頭の禿げた不動産屋が言った。「ま、かなりうるさいんだけどさ、それさえ我慢できりゃ掘り出しものと言えなくもないだろうね」

「とにかく見せてもらえますか？」と僕は訊ねた。

「いいよ、でもさ、あんたたちだけで行ってきてくんないかな？　俺、あそこ行くと頭痛むんだよ」

　彼は鍵を貸してくれ、家までの地図を描いてくれた。気楽な不動産屋だ。

　駅から見ると「三角地帯」はすぐ近くに見える。でも実際に歩いてみると、そこに辿りつくまでにはおそろしいくらい時間がかかる。鉄道線路をぐるっと迂回し、陸橋を渡り、こぎたない坂道を下りたり上ったりして、やっと後側から「三角地帯」に回り込むのである。あたりには商店とかそんなものは一切ない。見事なくらいうらぶれている。

　僕と彼女は「三角地帯」の先端にぽつんと建っている家の中に入り、一時間ばかりそこでぼんやりしていた。そのあいだにずいぶんたくさんの電車が家の両側を通り過ぎていった。特急が通過すると、窓ガラスがピシピシと音を立てた。電車が通っているあいだはお互いの話は聞こえなかった。何かを話している最中に電車が通ると、我々は口をつぐんで電車がすっかり通りすぎてしまうのを待った。静かになって我々が話しはじめると、またすぐに次の電車がやってきた。そういうのってコミュニケーションの分断というか分裂というか、すごくジャン＝リュック・ゴダール風だ。

　でも騒音を別にすれば、家の雰囲気自体はなかなか悪くなかった。造りはたしかに古めかしいし全体的142に傷んではいたけれど、床の間やら濡れ縁やらがあって感じは良かった。窓から射し込んだ春の光が、畳の上に小さな四角い日だまりを作り出していた。それは僕がずっと昔、ほんの小さな子供の頃に住んだことのある家に似ていた。「借りることにしようよ」と僕は言った。「たしかにうるさいけれど、なんとか慣れると思うよ」

「あなたがそう言うんなら、それでいいわよ」と彼女は言った。

「ここでこんな風にじっとしているとさ、まるで自分が結婚して、家庭を持っているような気がするんだ」

「だって本当に結婚したんじゃない？」

「そりゃあまあそうだけどさ」と僕は言った。

我々は不動産屋に戻り、家を借りたいと言った。

「うるさくなかった？」と頭の禿げた不動産屋が訊ねた。

「そりゃあうるさかったけれど、なんとか慣れますよ」と僕は言った。

　不動産屋は眼鏡をはずしてガーゼでレンズを拭き、湯飲みの茶を一口すすり、それから眼鏡をかけて僕の顔を見た。

「ま、若いからね」と彼は言った。

「ええ」と僕は言った。

　そして我々は賃貸契約をとりかわした。

　引越しは友だちのライトバン一台で十分、間にあった。布団と衣類と食器と電気スタンドと何冊かの本と一匹の猫、それが我々の全財産だった。ラジオもなければテレビもなかった。洗濯機も冷蔵庫も食卓も143ガス・ストーブも電話も湯わかしも電気掃除機もトースターも、何ひとつなかった。我々はそれくらい貧乏だった。だから引越しといってもものの三十分とかからなかった。金がなければないで人生はすごく簡単だ。

　引越しを手伝ってくれた友人は二本の線路にはさみこまれた我々の新しい住居を目にしてかなりびっくりしたようだった。彼は引越しを終えてから僕の方を向いて何かを言おうとしたが、ちょうど特急列車が走りかかったおかげで何も聞こえなかった。

「何か言った？」

「本当にこんなところに人が住むんだなあ」と感心したように彼は言った。

　結局我々はその家に二年住んだ。

　おそろしく建てつけの悪い家で、すきま風がいたるところから入ってきた。おかげで夏は快適だったが、そのかわり冬は地獄だった。ストーブを買う金もなかったので、日が暮れると僕と彼女と猫は布団の中にもぐりこみ、文字どおり抱きあって眠った。朝起きてみたら台所の流し台が凍りついていたなんてこともしょっちゅうだった。

　冬が終わると、春がやってきた。春は素敵な季節だった。春がやってくると、僕も彼女も猫もほっとした。四月には鉄道のストライキが何日かあった。ストライキがあると、僕たちは本当に幸せだった。電車は一日じゅうただの一本も線路の上を走らなかった。僕と彼女は猫を抱いて線路に降り、ひなたぼっこをした。まるで湖の底に座っているみたいに静かだった。僕たちは若くて、結婚したばかりで、太陽の光はただだった。

　僕は今でも「貧乏」という言葉を聞くたびに、あの三角形の細長い土地のことを思い出す。今あの家に144はいったいどんな人が住んでいるんだろう？